OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	農事暦としての雪形 ： 『長野県史民俗編』編纂資料から
Author(s)	荒山, 正彦
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1991, 25, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

農事暦としての雪形

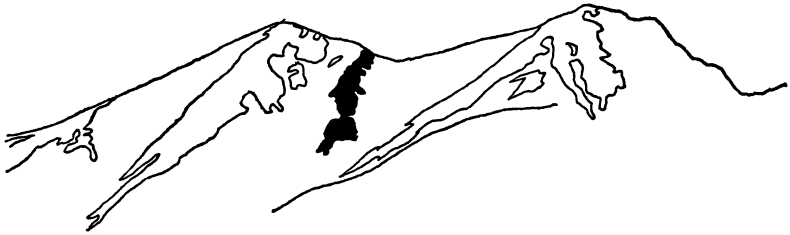
——『長野県史民俗編』編纂資料から——

荒山正彦

I

雪形（ユキガタ）は，晩春から初夏にかけて，山の雪が消えのこる形や消えとけた形を，[1] 麓から仰ぎみて，馬や牛，人形（ヒトガタ），農具，文字などに見たてた残雪模様で，民俗学では残雪絵（向山，1969）とよばれることもある。この残雪と山肌が作り出す模様は，晩春から初夏にかけてあらわれることから，苗代作りや田起し，田植，畑作物の播種などの農作業開始の時期を知らせる自然の農事暦とされてきた。たとえば千葉（1986）は，「いわゆるユキガタが，翌年あるいは当年の農耕の開始や順序を示す民間暦の基準として利用され」たと述べているし，また具体的な雪形の伝承においても，「爺ケ岳の山肌が春先になるとだんだん雪が消えて黒く見えてくる。その形がじいのように見えるのをタネマキジッサと呼ぶ。タネマキジッサの形が見え始めると苗代作りを始め，全部見えるころに種まきをする。」[2] というように，爺ケ岳[3] の山肌の残雪模様が種をまく爺さんの形に見たてられ，この雪形の出現と変化が農事の目安とされていることを物語っている。

第1図はこの爺ケ岳のタネマキジッサの雪形のスケッチである。先の伝承ではこの黒い残雪模様が種まき爺さんの姿に見たてられ，この雪形の出現と変化が農事の目安とされているのであるが，このような残雪模様を種



第1図　爺ケ岳の雪形・タネマキジッサ

まき爺さんに見たてるためには，眺める側がある共通した見方を受容していなければならない。すなわち，一般に種まきをする爺さんの姿は知っていても，山肌に出現するタネマキジッサの雪形は簡単には発見できないのである。しかしこのことは，農事暦としての雪形伝承が民俗知識として実際に利用されることでのみ伝承されていくであろうこと，また集落から望み得る周囲の景観の中で，雪形が出現する山がランドマークとして特定の意味が付与されているであろうことを示唆するものである。

このように雪形伝承の内容は，人が山の残雪模様という外界の環境を観察し，そこから農事の時期を知り，農作業にとりかかるきっかけとするような伝承であるが，これと同様に山の様子の観察を通じて具体的な行動の契機とする伝承は，何も雪形の事例ばかりではなく，さまざまに伝承されてきているのである。たとえば「黒姫山に薄雲がかかれば雨が降る。」[4] という天候の前兆を知る民俗知識は，山の様子を観察するという点では，農事暦としての雪形伝承と同様である。また一方で，雪形は農事暦としての役割をもつのだが，雪形以外でもたとえば花の開花や鳥の鳴き始めなどが農事の目安とされている例は，広く知られるところでもある（宇都宮，1982)。したがって，本稿で題材とする雪形は，自然環境の観察を通じた農事暦のなかで，とくに山を仰ぎみて残雪の形に注目する民俗事象であるといえよう。そこで，この「山を仰ぎみる」という点を手がかりとしつつ，長野県内における農事暦としての雪形の実態に迫ってみたい。

ところで，わが国における雪形伝承は全国的にどれほど分布しているのであろうか。雪形に関する記録は，近世の旅行記や地誌書に散見されるものの，[5] 文字や絵に記録されることは少なかったようである。全国的に雪形の実態を概観するためには，各市町村誌史・県史の民俗編，あるいは『日本の民俗』[6] シリーズなどの民俗誌に採録された各地方ごとの雪形伝承の記録を集積せねばならない。岩科（1968）と田淵（1981）は，このような記録と聞き取り調査などを併せて，全国的な雪形分布の実態を報告している。わが国における雪形は，岩科（1968）によって100種類，田淵（1981）によって311種類報告されているが，その分布域はおもに中部山岳地帯以東の中部地方や東北地方が中心になっている。

雪形が伝承されるためには，日常的な生活圏から残雪の山が仰望されねばならないが，一般に樹林帯の残雪よりも，森林限界を越えた高山帯や樹林相の少ない沢筋の残雪が麓からはよくみえる。それゆえ雪形が山肌に出現するためには，冬季に多量の積雪があること，そして集落から眺めうる比較的標高の高い山があることが基本的な条件になる。したがって雪形伝承が中部山岳地帯以東に分布するという指摘は当をえている。このような全国分布の中で，長野県は「雪形の宝庫」とも称されるように，四周を高山に囲まれ，また県内には標高2000メートルを越える山岳地帯が卓越しており，尚かつこれらの山岳地帯はわが国でも有数の積雪地帯である。長野県は全域として雪形が豊富に存在するような自然条件に恵まれているといえよう。

しかしながら，今日では雪形を背景にした農作業の風景はほとんど見られなくなっており，忘れられつつある多くの民俗事象と同様に，今日聞き取り調査からその全容を明らかにすることは困難であると考えられる。ところがこのような研究環境のなか，昭和59年から刊行が始まった『長野県史民俗編』編纂において，農事暦としての雪形が民俗資料調査項目に加え

られ，今まで記録されることのなかった雪形も含めて，長野県全域における農事暦としての雪形の実態が調査されたのであった。本稿では，この民俗調査資料を長野県史刊行会において閲覧利用させていただき，すでに刊行された『長野県史民俗編』では言及されなかった農事暦としての雪形の実態を整理したいと考える。但し後述のように，『長野県史民俗編』編纂にあたっては，555項目にも及ぶ調査項目が設定されており，農事暦としての雪形のみを対象とする調査資料ではない。しかしながら，そのような資料の精度を了解し，筆者の聞き取り調査によって欠を補いつつ同調査資料を用いることは，第一次産業を主とする村落生活のなかで伝承されてきた事象を対象とするとき，非常に有効であると考える。

Ⅱ

『長野県史民俗編』刊行に先立つ民俗資料調査の経緯については，倉石（1976）によって報じられているので，これを参考にして概要を辿ることにする。『長野県史』は昭和43年に長野県の依託を受け，長野県史刊行会が編纂刊行を進めた。長野県史刊行会内に民俗資料調査委員会が発足したのは，昭和47年であった。同委員会では，長野県内の民俗の実態把握を目的として，民俗の全分野にわたり，県下全域を対象とした網羅調査が計画実行されたのであった。当初は全戸調査も想定されていたというが，実際には明治21年ごろを基準とする約410の旧町村について，ほぼ1つの旧町村から1つの集落が選定され，結果的に424集落が調査対象となった。調査にあたっては，調査当時70歳以上の話者が1集落数人ずつ選ばれ，話者総数は3,297人を数えた。調査項目は，まず12の項目（衣生活，食生活，住生活，生産・生業，交通交易，社会生活，信仰，民俗知識，人の一生，年中行事，芸能・口頭伝承，方言）が設定され，方言を除く555の調査項目が具体的に取り決められた。そして，調査項目・話者ごとに調査票を用

いた対面調査がおこなわれたのであった。[7]

農事暦としての雪形は,「生産・生業」の1調査項目として設定された。調査票の具体的な質問は,「春,山肌に現われる雪形を見て田・畑の仕事を始める目安とすることがありますか。山の名,現われる形,目安とする仕事は何ですか。」(長野県史刊行会編, 1977)というように,雪形の農事暦という役割に注目して行なわれたのであった。[8] このように雪形が調査項目に加えられ,県内全域を対象として調査がなされた例は,他県ではみられなかったことである。調査期間は,各集落の調査票に記載された日付を参考にすると,昭和49年8月から同54年3月までであった。

上述の調査を資料として刊行された『長野県史民俗編』は全14冊の大著であるが,雪形に関する記述は,「生産・生業 耕作と季節」という見出しのなかで,長野県の各地方区分(北信地方・東信地方・南信地方・中信地方)ごとに,聞き取りによって集められた雪形の伝承が列記されている。[9]

そこで次章では,オリジナルの調査票と既刊の『長野県史民俗編』を用いて,雪形伝承の内容の再検討と,長野県内における雪形伝承の分布,そして本稿では特に雪形を見たてる山を具体的に明らかにする。

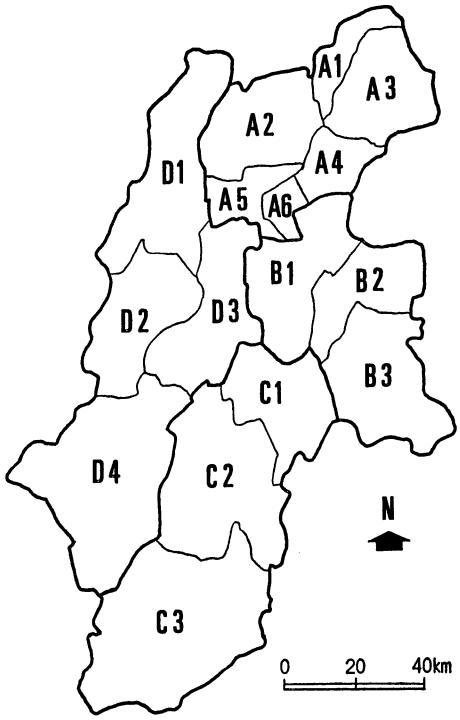
Ⅲ

まず,具体的な雪形伝承の事例を取り上げ,雪形伝承の内容を再検討してみたい。本稿の冒頭でも紹介したように,雪形は残雪絵ともよばれ,山の残雪を馬や牛,人形(ヒトガタ),農具,文字などの意味ある形に見たてたものを指すが,このような意味ある形を伴っていない残雪の模様も,農事暦として伝承されているのである。たとえば,上水内郡戸隠村追通(おつかよう)では「虫倉山の雪がまだらになったら麦の一番肥料をくれる。」といわれ,また諏訪郡富士見町葛窪(くずくぼ)では「駒ヶ岳のてっぺんに雪が少し残った頃苗代を始めた。」といわれている。この2つの

事例では，残雪の様子は観察されていても，その残雪模様を牛や馬などの意味ある形に見たててはいないのである。加えて，残雪模様の出現のみが農事暦となるのではなく，残雪の消滅，すなわち完全な雪解けが農事期の目安とされている事例もある。上田市（旧小県郡）上本郷では「むこう山〔独鈷山〕の雪が消えるとごぼうをまく。」という。すなわち残雪模様には，雪形や残雪絵と呼びうるような意味ある形だけではなく，単なる残雪や残雪の完全な消滅なども含まれている。つまり農事暦としての雪形伝承においては，ひとところに残った残雪から具体的なものの形をなす残雪まで，連続したバリエーションを認めざるをえないのである。見たてる対象が馬であるか牛であるか，あるいは単なる残雪かという区別は，第1図のタネマキジッサの事例からも推測されるように，厳密には難しい。したがって，農事暦としての雪形を取り上げるとき，雪形や残雪絵ということばが指示するような意味ある形の残雪模様ばかりではなく，山の残雪の様子が観察されている事例はすべて対象にされねばならないのである。このような基準に立って，長野県における農事暦としての雪形について，その分布と雪形を見たてる山についてまとめてゆきたい。

第1表は長野県史刊行会によって行なわれた調査結果の概要を表している。オリジナルの調査票にもとづいて，農事暦としての雪形伝承の有無を，旧16郡ごとに集計を行なった。また第2図は第1表と対応しており，A1～D4は旧16郡をそれぞれ示し，A1～A6 は北信地方，B1～B3 は東信地方，C1～C3 は南信地方，D1～D4 は中信地方を示している。

民俗資料調査にあたっては，424集落が対象となっていたが，農事暦としての雪形の調査では，未調査・未回収の調査票が40集落分あり，現在整理されている調査票は384集落分である。この384集落を有効調査集落数とすると，農事暦としての雪形伝承がある集落は242集落で，全体の約6割に相当する。一方雪形伝承の採集されなかった集落は142集落であるが，



第２図　長野県における旧16郡

第１表　長野県旧16郡における雪形伝承の調査結果

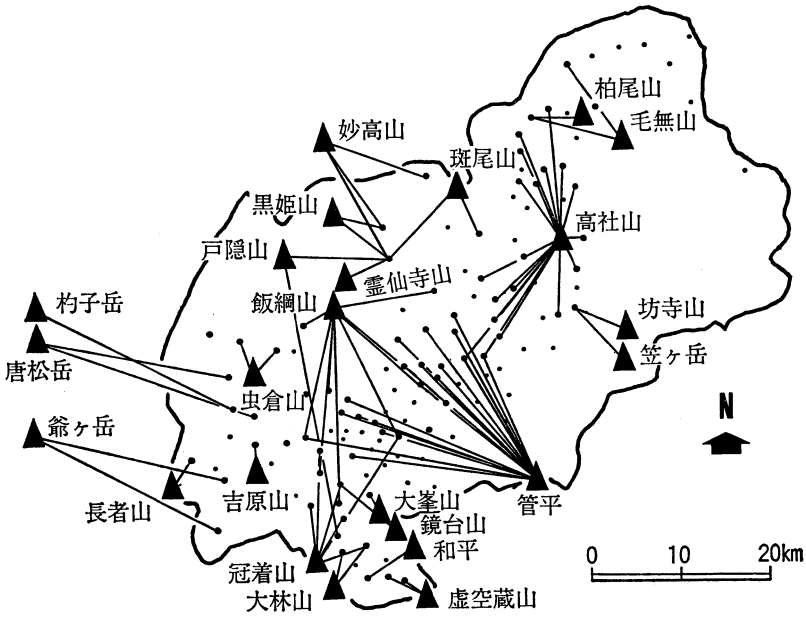
	調査集落	雪形あり	未調査	合　計
北　信　地　方	130	77 (59%)	7	137
A1 下水内郡	15	9 (60%)	0	15
A2 上水内郡	34	25 (74%)	2	36
A3 下高井郡	22	13 (59%)	3	25
A4 上高井郡	15	6 (40%)	0	15
A5 更　級　郡	28	16 (57%)	1	29
A6 埴　科　郡	16	8 (50%)	1	17
東　信　地　方	77	44 (57%)	11	88
B1 小　県　郡	34	22 (65%)	1	35
B2 北佐久郡	22	10 (46%)	6	28
B3 南佐久郡	21	12 (57%)	4	25
南　信　地　方	94	61 (65%)	9	103
C1 諏　訪　郡	25	21 (84%)	1	26
C2 上伊那郡	28	24 (86%)	4	32
C3 下伊那郡	41	16 (39%)	4	45
中　信　地　方	83	60 (72%)	13	96
D1 北安曇郡	15	13 (87%)	4	19
D2 南安曇郡	14	14(100%)	3	17
D3 東筑摩郡	38	23 (61%)	3	41
D4 木　曽　郡	16	10 (63%)	3	19
長　野　県　合　計	384	242 (63%)	40	424

但し数字は集落数を表す。

たとえば小県郡長門町宮の上では「谷間の村のため遠くの高い山が見えない」として雪形が集落に伝承されていない理由を述べている。このように，雪形を集落から眺めることのできる自然条件が基本的に欠けている集落が存在することを考慮するならば，農事暦としての雪形伝承を有する集落が全体の約6割あったという事実は，長野県では農事暦としての雪形がゆたかに伝承されてきたことを実証する。

各地方区分のなかでは，中信地方（72%）の割合がやや高いといえる程度であるが，これを旧郡別にみると，中信地方の南安曇郡（100%）と北安曇郡（87%），南信地方の上伊那郡（86%），北信地方の上水内郡(74%)では高い割合で雪形伝承があり，南信地方の下伊那郡（39%）や北信地方の上高井郡（40%）では低い割合となっている。従来，長野県内には雪形が多く存在すると一般論的にいわれてきたが，実際には雪形伝承を有している集落分布は県内全域に均一にあるのではなく，特定の範囲に高密度な分布域が設定できると考えられるのである。

さて，農事暦としての雪形の調査票からは，各集落ごとに見たてる山，雪形の種類，目安とする農事についての情報を読み取ることができる。このうち雪形の種類と目安とする農事については，既刊の『長野県史民俗編』に採録されているので，本稿では雪形を見たてる山に注目してみたい。第3図から第6図は北信地方，東信地方，南信地方，中信地方それぞれについて集落と見たてる山との関係を図示したものである。[10] 第3図から第6図はいずれも，それぞれの有効調査地点について，雪形伝承が採集されなかった集落（図中の小さいドット）と，農事暦としての雪形伝承があった集落（図中の大きいドット）を区別し，同時に雪形を見たてる山を図示した。そして雪形伝承がある集落については，見たてる山とを線分で結んで明示した。四地方はいずれも中央は盆地や平地で，周囲は山地に取り囲まれている。したがって，集落が立地している調査地点は図の中央に位置し，

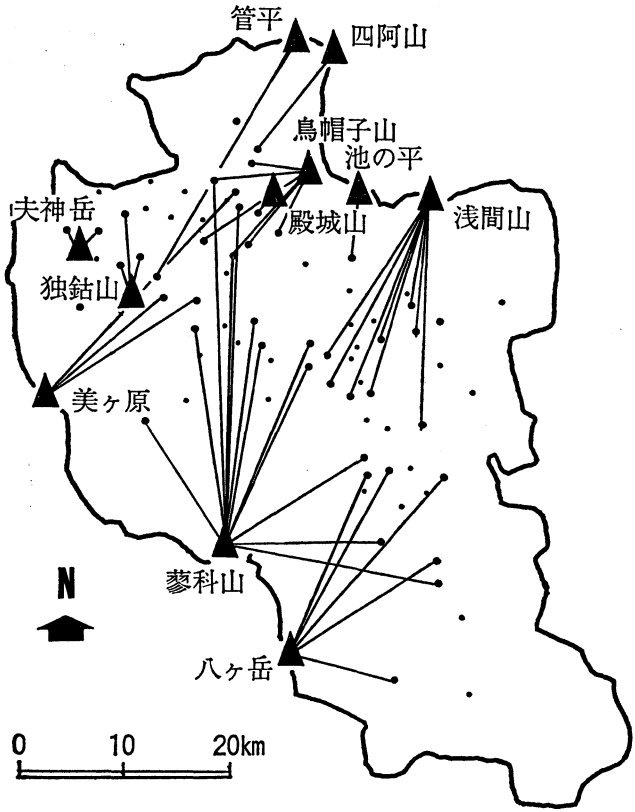


第3図　北信地方

周辺の行政界に雪形を見たてる山が位置することになった。

集落と見たてる山との関係は，基本的には1つの集落から1つの山を見たてる。その結果，特定の山が多くの集落からのみ見たてられている場合もあれば，1つないしは2つの集落から見たてられている場合がある。また事例は少ないが，1つの集落から複数の山を見たてる場合もある。集落から見たてる山までの距離は，およそ20キロメートル程度で，最大でも50キロメートルである。次に第3図から第6図を参照しながら具体的に見たてる山を明らかにしてゆきたい。

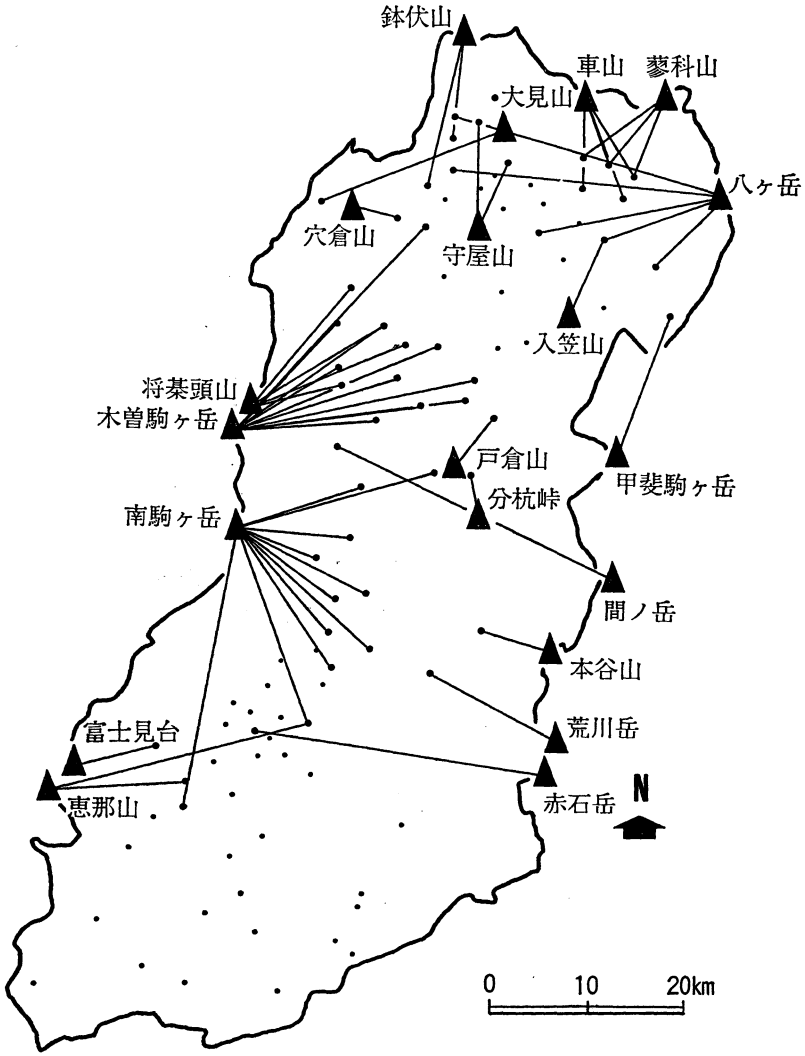
第3図北信地方では高社山，菅平，飯綱山に雪形を見たてている集落が多い。第4図東信地方では浅間山，蓼科山，八ケ岳に，第5図南信地方では木曽駒ケ岳，南駒ケ岳に雪形を見たてている集落が多い。そして第6図



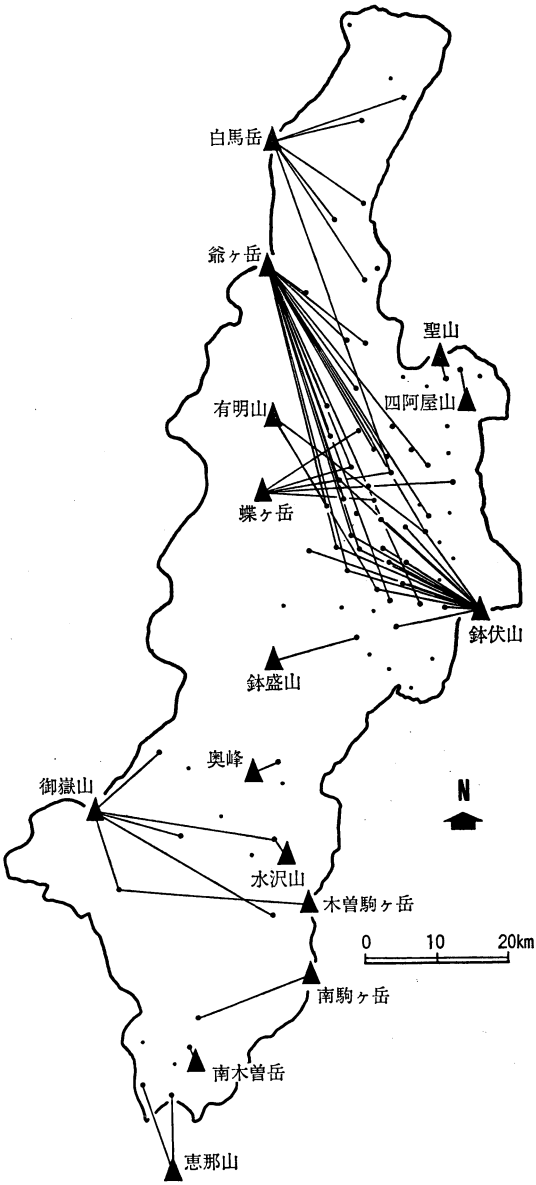
第4図　東信地方

中信地方では爺ヶ岳，蝶ヶ岳，鉢伏山に雪形を見たてている集落が多いことが明らかとなった。雪形が見たてられる山は総数63山になるが，このようにいくつかの特定の山は，多くの集落から雪形を見たてられているのである。

これを一覧したのが第2表である。第2表は，雪形が見たてられている山のなかで，5つ以上の集落から見たてられている山を列記したものであ


鉢伏山
車山
蓼科山
大見山
八ヶ岳
穴倉山
守屋山
入笠山
将棊頭山
木曽駒ヶ岳
戸倉山
分杭峠
甲斐駒ヶ岳
南駒ヶ岳
間ノ岳
本谷山
荒川岳
富士見台
恵那山
赤石岳
N
0
10
20km

第5図　南信地方


白馬岳
爺ヶ岳
聖山
四阿屋山
有明山
蝶ヶ岳
鉢伏山
鉢盛山
奥峰
御嶽山
N
水沢山
木曽駒ヶ岳
0
10
20km
南駒ヶ岳
南木曽岳
恵那山

第6図　中信地方

第2表　雪形を見たてる山

山名	集落数	山名	集落数	山名	集落数
爺ヶ岳	23	南駒ヶ岳	12	蝶ヶ岳	7
高社山	19	木曽駒ヶ岳	11	冠着山	6
菅平	19	飯綱山	10	白馬岳	6
鉢伏山	18	八ヶ岳	10	烏帽子山	6
蓼科山	15	浅間山	8	御嶽山	5

る。これらの山々が多くの集落での雪形伝承の対象となっている事実には，それぞれの山ごとの要因があろうが，集落から望み得る周囲の景観の中で，これらの山が特定の意味を付与されたランドマークとなっていることを示唆している。

Ⅳ

雪形については，残雪模様の出現や変化が農事の目安とされることと，農事暦とされている具体的な雪形伝承の記録が従来おこなわれてきた。本稿では，長野県内における具体的な雪形伝承の記録を用いて，雪形伝承をもつ集落の分布と，雪形を見たてる山とを明らかにしてきた。農事暦としての雪形には，非常に広い範囲から仰望されるものと，ごく限定された集落からのみ仰望されるものまでさまざまであることが明らかとなった。

また，農事暦となるような雪形伝承では，牛や馬などの意味ある形を伴った残雪模様ばかりではなく，ひとところの残雪が残ったり消えたりする様子までも含めた，残雪のバリエーションがあった。

最後に，本稿は山を仰ぎみる民俗として，農事暦としての雪形を題材としたのだが，雪形を見たてる山が集落から望み得る周囲の景観の中で，どのような意味が付与されているのかという点については，第Ⅰ章で述べたような天候の前兆を知る民俗知識などと併せて，今後考察すべき課題であると考える。

（付記）本稿の作成にあたり社団法人長野県史刊行会の民俗編編纂の方方には資料の閲覧・利用に際して格別の便宜をはかっていただきました。ここに篤くお礼申し上げます。

注

1) 残雪模様には，雪が消え残った白い雪形と，雪が消えとけて山肌が形をなす黒い雪形がある。

2) これは長野県南安曇郡穂高町新屋（あらや）での伝承である。『長野県史民俗編』，3-2，1989，p. 17.

3) 北アルプス，標高2760メートル。長野県と富山県の県境に位置する。残雪期に山腹に出現する「種まき爺さん」が山名の由来となった山として知られている。

4) 長野県上水内郡信濃町古海（ふるみ）。『長野県史民俗編』，4-3，1986，p. 5.

5) たとえば菅江真澄の旅行記「すみかの山」や『甲斐国史』など。

6) 昭和37年から同39年に文化庁がおこなった民俗資料緊急調査をもとにして各県ごとに『日本の民俗』（第一法規）が刊行された。事例は少ないが雪形の記録がみられる。

7) この調査資料は，現在（1991年7月）長野県史刊行会に保管されており，一般の閲覧・利用が可能である。

8) 雪形の農事暦という役割に注目して調査が行なわれたため，農事の目安とされていない雪形は記録されていない。農事の目安にされていない雪形としては，五龍岳の武田菱の雪形，常念岳の常念坊の雪形，鹿島槍ケ岳のツルとシシの雪形，島田頭の島田娘の雪形などが知られている。

9) 『長野県史民俗編』は各地方ごとに刊行されており，雪形は次の4冊に記述されている。『長野県史民俗編東信地方』，1-2，1986，pp. 18-22.，『長野県史民俗編南信地方』，2-2，1988，pp. 16-20.，『長野県史民俗編中信地方』，3-2 1989，pp. 16-23.，『長野県史民俗編北信地方』，4-2，1985，pp. 18-23.

10) 第3図から第6図の作図にあたり，雪形が出現する山を確認できなかったものがいくつかあった。たとえば長野市栗田「ジャガイモは山の雪，霜の状態をみてする」や，小県郡真田町横道「自分の家の北にある山」といった事例からは山を特定することができない。また，1つの山に出現する雪

形は必ずしも1つとは限らない。

文献

岩科小一郎（1968）:「雪形考」,『民俗民芸双書34　山の民俗』, 岩崎美術社, pp. 200–241.

倉石忠彦（1976）:「『長野県史』民俗資料調査のあゆみ」,『信濃』, 28–1, pp. 82–97.

田淵行男（1981）:『山の紋章　雪形』, 学習研究社, 317p.

千葉徳爾（1986）:「日本の民俗と自然条件」,『日本民俗文化体系1　風土と文化』, 小学館, pp. 111–176.

向山雅重（1969）:「残雪絵考　—雪形と農耕について—」,『岳人』, 262号。(『向山雅重著作集　山国の生活誌第二巻　山国の生業』, 新葉社, 1988, pp. 105–117.)

宇都宮貞子（1982）:『民俗民芸双書 87　植物と民俗』, 岩崎美術社, 285p.

長野県史刊行会編（1977）:『民俗資料調査の手引き』, 改訂版, 69p.

（大学院後期課程学生）